

【資料1 自転車と歩行者の接触事故】

	平成 16年	平成 17年	平成 18年	平成 19年	平成 20年	平成 21年	平成 22年	平成 23年	平成 24年	平成 25年	平成 26年
歩行者との 事故	2,543	2,617	2,783	2,869	2,959	2,946	2,770	2,806	2,625	2,605	2,551
自転車事故 全体	188,338	183,993	174,469	171,169	162,662	156,485	151,681	144,058	132,048	121,040	109,269

(「警察庁 交通事故の発生状況について 平成26年」による)

【資料2 自転車事故を防ぐための対策メモ】

- 1 自転車は車道の左側を走る。(歩道の自転車走行は例外)
- 2 歩道は歩行者優先を心がける。
- 3 交差点などではとくに周囲に気を配り、安全を確認する。
- 4 安全ルールを守る。(飲酒運転の禁止、二人乗りの禁止、
夜間のライト点灯、信号を守るなど)
- 5 走行時にヘルメットを着用する。

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の文中の三字熟語の△と○には、下の二字熟語の△と○と共通の漢字が入ります。当てはめてできあがった三字熟語を解答らん(とく)に書きなさい。

- (例) △○成 △合 ○変 ↓ 答え 集大成

① △一○が吹いた △風 ○号

② 君がいれば百△○だ △間 努○

③ 彼はまだまだ△二○だ △空 ○能

④ ついに千△○をむかえた 中△ 音○

⑤ 五△○をあつめてはやし最上川 もがみがわ 満△ 梅○

問2 翼くんの学校では、交通安全についての講演会が行われました。その後、学級委員会で交通安全についてのポスターを作ることになりました。【資料1】、【資料2】と【ポスター】を参考にしながら、後の問いに答えなさい。

【ポスター】

自転車事故をなくそう



平成16年とくらべて、今年の
自転車事故は ア した

が！

歩行者との間での事故数は
 ア していない

つまり

自転車と歩行者の事故の割
合は イ している！



◎自転車は車と同じ、
危険がともなう
乗り物です！

自転車事故をふせぐための対策

交通ルールを守ろう。

- ① 2人乗りをしない
- ② 暗くなったらライトをつける
- ③ 信号を守る

自転車は車道の左側を走ろう。

歩道を走るときは歩行者優先を心がけよう。

自転車に乗るときはヘルメットを着用しよう。

*

交通安全標語コンクール開催！

ぼくたちの町の安全を守るための標語を募集します。

くわしくは学級委員会まで！

(1) 空らん

ア

と

イ

に

あ

て

は

ま

る

言

葉

を

(2) 空らん

*

に

あ

て

は

ま

る

言

葉

(3) 交通安全ポスターの一番下にある「交通安全標語コンクール」にあなたも参加することになりました。次の条件にしたがって標語を
作成しなさい。

《条件1》【資料2】の1～5の中から一つ選んで、それに関する標語とすること。

《条件2》表現方法は川柳（五・七・五）の形式をとること。字あまり・字たらずは認めない。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（抜き出しの場合には句読点や記号も一字に数えます。）

今日私たちが用いる知的能力の量は過去よりも少ないとも言えます。それに、昔とまったく同種の能力を用いているわけでもありません。たとえば、感覚的知覚の利用はあきらかに少なくなっています。『神話論』の初稿を執筆中に、ひじょうにふしぎな問題にぶつかりました。真昼間に金星を見ることのできるとくべつな部族があるらしいのです。それは私にとってはまったく不可能な信じられないことでした。天文学のセンモンカにたずねますと、もちろん私たちには見えないが、真昼間に金星のハナツ光の量を知れば、ある人びとには金星が見えるというのもまったく考えられないことではない、という返事でした。それから、西欧文化圏の航海術についての古い本をいろいろ調べてみました。するとやはり、昔の船乗りたちは真昼間に金星を見る能力をかんぜん（完全）にソナえていたらしいのです。おそらく私たちは目を訓練すればいまでもそうできるのでしょう。

植物や動物についての私たちの知識についてもまったく同じです。無文字民族は自分たちの環境とシゲンのすべてについて、途方もなく正確な知識をもっています。こうしたものすべてを私たちはうしなってしまうのですが、その代償として何も得なかったわけではありません。たとえば、どのしゅんかんにもおしつぶされる危険性があるのに、そういうこともなく自動車を運転できるし、夕方にはテレビやラジオをつけることもできます。それには知的能力の訓練が必要ですが、「未開」民族は必要がないためそういう能力をもちません。潜在能力としては精神の性質を変えることもできたはずですが、この人たちの生活様式と自然との関係から見ると、その必要がないのでしょう。人間のもつ多様な知的能力をすべて同時に開発することはできません。ごく小さな一部分を使用しうのみで、どの部分を用いるかは文化によって異なります。それだけのことです。

いろいろの地域に住む人類が異なる文化をもつにもかかわらず、人間精神はどこでも一つで同じであり、同じ能力をもつ、というのが、人類学研究の数多くの結論の一つでありましょう。それは現在どこでもうけいれられている結論だと思っています。

それぞれの文化が体系的組織的に他と異なるようにつとめたとは思いません。事実はどうです。何十万年のあいだ地球上の人類はあまり多くなくて、小さな集団がばらばらに住んでいました。したがって、各集団がそれぞれの特徴を發展させ、他と異なるようになったのはごく当然のことです。なにも意図してそうになったものではありません。たんに、ひじょうに長い期間支配的だった諸条件の結果にすぎません。

さて、この状態がそれじたい有害であるとか、そういう相違は克服されるべきであるとは考えないでいただきたいのです。事実、相違とはひじょうに豊かな力をもつものです。進歩は、相違とおしてのみなされてきました。現在私たちをおびやかしているものは、オーヴァー・

コミュニケーション」でもよびうるものでしょう。

A

、世界のある一点にいて、世界の他の部分で何が行われているかをすべて正確に知りうるようになる傾向です。ある文化が、真に個性的であり、何かをうみだすためには、その文化とその構成員とが自己の独自性に確信をいだき、さらにある程度までは、他の文化に対して優越感さえいだかねばなりません。その文化が何かをうみだしうるのはアンダー・コミュニケーションの状態においてのみなのです。私たちはいま、たんなる消費者になり、世界のどの地点のどの文化から得られるどんなものでも消化できるけれども、独自性をすっかりうしなってしまうのではないかという展望におよびやかされています。

地球上いたるところ、ただ一つの文化、一つの文明だけになる時代を私たちはいまや容易に想像することができます。

B

私は実

際にそうなるとは信じません。対立する傾向——一方は均一化へ、他方はあらたな個別化へ、という傾向が互に作用するからです。文明が均一になればなるほど、分離しようとする内的な傾向がはつきりしてきます。また、あるレヴェルで得られるものが、ただちに他のレヴェルでうしなわれます。これは個人的印象であり、この弁証法的作用についてはつきりした証拠があるわけではありません。しかし人類がほんとになんらかの内的多様性なしに生きうるとは思えないのです。

(クロード・レヴィ・ストロース／大橋保夫訳『神話と意味』より)

※作問の都合上、文章の一部を改変しています。

* 「未開」民族……筆者は「未開民族」という呼び方を適切ではないと考えるため、「無文字民族」という言葉を使用している。そのためここではあえてかつこ書きされている。

* オーヴァー・コミュニケーション……「オーヴァー」は超過の意味。「コミュニケーション」は社会生活を営む人間が言語などを介して意志の疎通を図ること。この後にある「アンダー」は「オーヴァー」の逆の内容をさす語。

* 弁証法……対話術、問答術を意味する。

問1 傍線部ア～エのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 本文は次の読者からの質問に筆者が答えたものです。後の問いに答えなさい。

質問

私たちの多くは自分の知的能力の一部しか用いておらず、残りの能力は完全に閉め出されているそうです。今日の私たちの生活では、先生が書いておられる、神話の様式で思考した人々にくらべて、私たちは知的能力の使い方が少ないとお考えですか。

(1) この質問に対して筆者はどのように答えていますか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

(2) 筆者が(1)のように考えるのはなぜですか。本文中の言葉を用いて七十字以内で答えなさい。

問3 傍線部①「真昼間に金星を見る」とありますが、そのためには何が必要ですか。次の【説明文】の空らんにあてはまる言葉を本文中から五字で抜き出して答えなさい。

【説明文】

を使うこと。

問4 傍線部②「この人たちの生活様式と自然との関係から見ると、その必要がないのでしょうか。」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無文字民族の人々には知的能力の訓練をする場所が提供されなかったから。
 イ 無文字民族の人々の生活の中では身につけても使うことのない知識だから。
 ウ 無文字民族の人々は植物などの知識についてすでに訓練して身につけているから。
 エ 無文字民族の人々には変化させることができるもとの精神の性質がないから。

問5 傍線部③「そういう相違」とはどのようにして生じましたか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 文化の作り手一人ひとりが、自分たちの文化のよさを認め合うことによって生じた。
 イ 他の文化について積極的に学んで、自他の違いを強調する工夫をしたことによって生じた。
 ウ 他の文化と長い間接する機会をもたなかったため、それぞれの文化が独自の発展をして生じた。
 エ 文化を統一しようという動きに対して、人々が反対する作用が働いたために生じた。

問6 本文中の空らん A B にあてはまる語句として適切なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア つまり イ また ウ だから エ でも オ ところで

問7 次の【文章A】は江戸時代の日本の文化について書かれています。本文中で筆者は、現在のわたしたちはこれと逆の状況にあると考えていますが、それを表す最も適切な一文を本文中から探し、はじめと終わりの五字を抜きだして答えなさい。

【文章A】

『水滸伝』に象徴されるように、江戸時代の人々は、中国の文化を使って日本の文化をつくり、あるいは活気を得ていました。枚挙のいとまがありませんが、中国の白話(話し言葉)短編小説を使った上田秋成の怪談小説『雨月物語』は、近代文学にも大きな影響を与えました。

(田中優子『グローバルゼーションの中の江戸』より)

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(抜き出しの場合には句読点や記号も一字に数えます。)

はじめておとずれた青空運動公園には、野球場と球技場があり、敷地のなかほどには芝生が広がっていた。緑色の高いネットフェンスにかこまれた球技場では、ユニフォーム姿のおとなたちがサッカーの試合をしていた。緑の多い園内には、施設をぬうようにクッションのきいたジョギングコースが整備されている。和彦と颯太は、その道を芝生の広場にむかっていそいだ。

「こいつは、貸し切りじゃないか!」

ほとんど人のいない広場の芝生を見て、和彦はさげんだ。

「やつほー!」

颯太ははやくも得意のドリブルで走っていく。

さつそく上着をぬいで、和彦は颯太とボールを蹴りはじめた。薄茶色に冬枯れした芝生には、ところどころ白詰草がパッチワークのように生えていたが、とても気持ちよかった。家からすこし距離があるものの、毎週ここへ来ようと和彦は決めた。

しばらくすると、公園内のジョギングコースを一台の軽トラックがのろのろとやってきて、ふたりに近い場所どまった。どうやら公園の管理事務所の車らしい。首にタオルをまきつけた作業服姿の男が、ドアを開けておりてきた。モスグリーンの長靴をはいた年配の男だった。風貌がどこかマンシヨンの管理人に似ていた。

「入口の看板見ませんでしたか? ここはサッカーなどの危険なスポーツは禁止です」

男は腰に手をあてて言った。

和彦の足元をボールがとおりすぎていく。ボールを蹴った颯太は、ばつが悪そうにうつむいてしまった。

「子供とボールを蹴ってるだけです」

「危険ですから」

①「危険って、周りにだれもないじゃないですか?」

和彦は外国人のように両手をおおげさに広げてみせた。

「あなたただけ、特別に認めるわけにはいかないんです」

言葉づかいはいいのだが、男の声にはいらだちがにじんでいた。こう言われたら、善良な市民であれば、さつさと引き下がるものなの

だろうか。無意識のため息がもれた。

「サッカーならね、専用グラウンドがあるから、そちらでやってください」

「それって、あそこのことですか？」

和彦は緑色のネットフェンスにかこまれた球技場を指さした。

「そう、毎月抽選^{ちゆうせん}ですけどね」

男は平然と言ってくれる。

「どういう感覚をしているのだろう、と思う。親子ふたりでサッカーをするのに、グラウンドを一面借りろというのだろうか。それともたんなるいやがらせなのか。」

③「本気で言ってるんですか？」

「規則^{きそく}ですからね」

「でも、だれもないし、気をつけますよ」

「だから看板を見てくださいよ。『危険なスポーツ、野球やサッカーは禁止』って、ちゃんと書いてあるでしょ。決まりなんです」

「でも、サッカーっていったって……」

和彦はそのときサッカーのルールブックにある条項^{じょうこう}を思い出していた。

サッカー競技規則第三条競技者規則。

『試合は十一人以下の競技者からなる二つのチームによって行われる。チームの競技者のうちの一人はゴールキーパーである。いずれかのチームが七人未満の場合は試合を開始しない』

親子でボールを蹴り合うのも、サッカーというのだろうか？

「それ、サッカーボールでしょ？ あなたどこのクラブの方ですか？ あんまりしつこいと、おたくのクラブ、ここの球技場を使えなくするよ」

男はそう言うと、軽トラックにもどっていった。

軽トラックはすぐには発車しなかった。たばこをすいながら、和彦たちが立ち去るのを見張^{みは}っているようだ。管理職^{*}になれない自分は、管理人との相性^{あいしょう}はすこぶる悪そう^{*}だ。和彦はくちびるの端^{はし}をゆがめて自嘲^{*じちよう}した。

「いこう」

つぶやくと、颯太はだまってついてきた。

芝生の上を I とふたりで歩いた。広場に人の姿がすくない理由がわかった気がした。

わざわざ車でやってきて、駐車料金^{ちやうしや}まで払^{はら}ったというのに、このさまだ。どうやらここへは、市民にはあまり来てほしくないらしい。芝生を管理する人間は、芝生がいたむのが迷惑^{めいわく}なのかもしれない。じゃあ、この芝生はいつたいなんのために植えたんだ。ベンチに座ってながめている、とでも言うのだろうか。規則、規則と言うけれど、それだけ拘束力^{こうさうりき}のある看板の言葉を、いったいいつだれが決めたのだろうか。二度と来るものかと思った。

夕暮れが近くなったせいか、公園には犬を散歩させている人の姿が多くなっていた。ふたりが広場を横切^{よこぎ}って歩いていくと、白い服を着せた胴^{どう}の長い茶色い犬を、老夫婦がつれていた。犬は首輪^{くわい}をしていたが、リードを解かれていた。飼い主がボールを投げると、嬉々^{きき}として追いかけては拾^{ひろ}ってきた。犬は何度もそれをくりかえし、それこそ自由に芝生の上をかけまわっていた。

——うちの息子は、犬以下かよ……。

和彦は心のなかでつぶやいた。もう怒る気にもなれなかった。

駐車場に看板が立っていた。

子供は地域の宝物

④ 思わず笑いそうになってしまった。

「ごめんな、颯太」

車に乗り込むと、和彦はうなだれて言った。

(はらだみずき『ホームグラウンド』より)

※ 管理職……会社などで、ある部門の業務に責任を負う立場の人。

※ 自嘲……自分自身を軽べつすること。

問1 傍線部ア、イの漢字の読み方を、ひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「和彦は外国人のように両手をおおげさに広げてみせた」とありますが、この行動についての説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ほとんど人のいない広場で息子と二人でサッカーボールを蹴っているだけであり、周囲への危険はまったくなくはずだということを、強く主張している。

イ ボールを蹴っているのは息子と自分の二人だけであり、これは正確にはサッカーといえないのではないかと、颯太のかわりに文句を言っている。

ウ サッカーなどの危険なスポーツは、周囲にだれもないこのような広場でこそ気がねせずにできるものであるという、自分の考えを大げさにアピールしている。

エ サッカーや野球などができる広い公園内の芝生の広場は、自分の家の周りにはいつさいないため、なんとかここを使わせてほしいと管理人に必死に頼んでいる。

問3 傍線部②「善良な市民」とありますが、ここでの「善良な」に最も近い意味の言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 陽気な イ 知的な ウ 健康な エ 従順な

問4 傍線部③「『本気で言ってるんですか?』」とありますが、この発言からわかるこのときの和彦の心情として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 遠くから遊びに来ている自分たちに対して、専用グラウンドを借りるための抽選に毎月参加するように命令する管理人の男に対し、怒りを感じている。

イ サッカーボールを蹴って遊びたいだけの自分たちに対して、専用グラウンドを使用する抽選に参加するように言う管理人の男の、感覚を疑っている。

ウ サッカーボールを蹴って遊ぶだけでも、抽選で専用グラウンドを借りなければならないという管理人の男の説明を真に受けて、不安になっている。

エ 自分と颯太がしんけんにうったえているにも関わらず、その気持ちに気づけずに冗談ばかり言っている管理人の男に対して、あわれみを感じている。

問5 本文中にある空らん I に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すたすた イ のろのろ ウ おずおず エ とぼとぼ

問6 傍線部④「思わず笑いそうになってしまった」とありますが、それはなぜですか、和彦の心情をふまえて説明しなさい。

問7 管理人の立場から、和彦たち親子の広場の使用を認められない理由を説明しなさい。

《条件1》本文の内容をふまえて根拠を二つあげること。

《条件2》七十字以内でまとめること。

国 語

受 験 番 号

氏 名

一

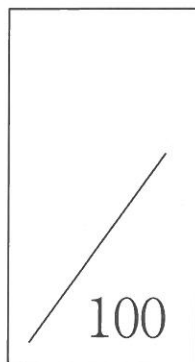
問 2			問 1
③	②	①	①
		ア	一
			②
			百
		イ	
			③
			二
			④
			千
			⑤
			五

二

問 7	問 4	問 3	問 2		問 1
			②	①	ア
	問 5				
ゝ		を使うこと。			イ
	問 6				
	A				つ
					ウ
	B				
					えて
					エ

三

問 7				問 6	問 2	問 1
						ア
					問 3	
						イ
					問 4	
70	50	30	10			ウ
					問 5	
						えて
						エ



解答

一

- 問一 ① 春（一）番 ② （百）人力 ③ 青（二）才 ④ （千）秋楽 ⑤ （五）月雨
問二 (1) ア 減少 イ 増加
(2) 交差点では周囲の安全に気を配ろう。
(3) 歩道では 歩行者優先 守ろうね

二

- 問一 ア 専門家 イ 放「つ」 ウ 備「えて」 エ 資源
問二 (1) 少ないとも多いとも言える。
(2) 人間のもつ多様な知的能力をすべて同時に開発ことはできず、ごく小さな一部を使用しうるのみで、どの部分を用いるかは文化によって異なるから。
問三 感覚的知覚
問四 イ
問五 ウ
問六 A ア B エ
問七 私たちはいゝています。

三

- 問一 ア しきち イ うわぎ ウ は「えて」 エ ねんばい
問二 ア
問三 エ
問四 イ
問五 エ
問六 「子供は地域の宝物」という看板があるのに、子供が公園の芝生で自由にサッカーボールを蹴ることも許されないという矛盾が笑えるから。
問七 公園内の芝生の広場では、サッカーなどの危険なスポーツは禁止という規則があり、和彦たちにだけ特別に例外を認めるわけにはいかないから。

解説

二

- 問二 (2) 続く文章で「人間のもつ多様な知的能力をすべて同時に開発することはできません。ごく小さな一部分を使用しうるのみで、どの部分を用いるかは文化によって異なります」と説明されています。

三

- 問六 「子供は地域の宝物」という看板を見た和彦は、公園内の芝生の広場でサッカーボールを蹴るだけのことでも子供に許そうとしない公園の管理人の態度を思いだし、矛盾を感じて笑うしかなかったのだと考えられます。